

熊取町埋蔵文化財調査報告第25集

中家住宅発掘調査報告Ⅱ

— 中家住宅 94—1 区 —

平成 8 年 3 月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町内では、現在のところ38ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地（遺跡）が確認されております。埋蔵文化財は、この地において旧石器の時代より築き上げてきた先人達の文化に実際に触れることのできる文化財の一つです。この貴い文化財を保護することは郷土を愛する心につながります。

さて、今回報告する中家住宅とは、熊取町大字五門にある重要文化財中家住宅とその周辺一帯の遺跡であります。中家は大久保にある降井家と共に泉南地方の旧家であり、中世には地侍であり近世は豪農として栄えた家であります。故にこの地が熊取町の中心となった場所であり、今後も発掘調査が進むにつれて徐々に熊取町の歴史が解明されていくでしょうが、その中にあってこの中家を中心とした地域の発掘調査は、熊取町ひいては泉南地域の文化解明のために重要なものとなるでしょう。

しかし近年、関西国際空港が開港されるなど、急速な土地開発が進み埋蔵文化財発掘調査件数は年々増加する一方であります。この様な状況の中で、本町教育委員会は失われてゆく遺跡の記録・保存に努めてまいりました。

本書は平成6年度に実施した旧郵便局跡地における郷土資料館新築工事および、重要文化財中家住宅消火設備工事に伴う発掘成果を概要報告ではありますが、たとえわずかでも文化財保護に貢献できればと願い発刊するものであります。

文末となりましたが現地での発掘調査にあたってご理解とご協力頂きました方々、ならびに関係者各位に対して心から感謝の意を表します。

平成8年3月

熊取町教育委員会

教育長 七里 弘

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が歴史文化施設整備事業における郷土資料館新築工事及び重要文化財中家住宅母屋の防火施設事業における消火設備工事に伴って平成6年度に実施した、中家住宅94—1区の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会町史編さん室前川 淳を担当者として実施した。
3. 4級基準点測量業務、航空測量及び図化作業は株式会社かんこうに委託した。
4. 本書における標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外については磁北を示すこととした。
5. 土色は、小山 正忠・竹原 秀雄編『新版標準土色帖』第10版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
6. 本書作成にあたっては、調査に協力頂いた調査員・調査補助員の方々の努力に負うところが多大である。明記して感謝を申し上げます。
桑原 良治、阪口 雅美、関井 澄子、武田 徹、水葉 希、南谷 克実、山本 恵子、吉田 知秋
また、遺物の観察について次の方々から協力を頂いた。ご芳名を記して感謝申し上げます。
近藤 康司氏、嶋谷 和彦氏、土山 健史氏（以上堺市埋蔵文化財センター職員）
7. 本書に掲載の遺物写真は、財團法人大阪府文化財調査研究センターの立花 正治氏、久禮 孝志氏に委託した。
8. 本書の執筆・編集は、前川 淳の協力のもと永井 仁が行った。

目 次

はしがき

例 言

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経過	2
第1節 既往の調査	2
第2節 調査の契機と経過	4
第3章 調査の概要	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺 構	5
第3節 遺 物	14
第4章 まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 熊取町の位置	1
第2図 中家住宅周辺の遺跡	3
第3図 93-1、94-1区調査位置図	4
第4図 A-1区造構断面図	7
第5図 S U01断面図	8
第6図 A-2区造構断面図	8
第7図 S X21平面図、断面図	9
第8図 S X22平面図、断面図	10
第9図 A-1区平面図、断面図	11
第10図 A-2区平面図、断面図	12
第11図 B区調査位置図、土層柱状図	13
第12図 S U02断面図	14
第13図 出土遺物	15
第14図 山土遺物	16
第15図 中家住宅旧平面図	20

図 版 目 次

図版第1 A-1区全景
図版第2 A-2区全景
図版第3 上層断面
図版第4 造構
図版第5 造構
図版第6 山土遺物
図版第7 出土遺物
図版第8 出土遺物
図版第9 出土遺物
図版第10 出土遺物

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央に位置し、貝塚市、泉佐野市の両市に囲まれた町である。

町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈している。町域の総面積は約17平方kmを有する（第1図）。地形については町南部において泉南地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占めており、北部においては和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また、北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

地形による面積比を見てみると山地が41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され山地丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。

町域に水源をもつ河川は大別して見出川、雨山川、大井山川の3水系が存在している。3河川とも町南部の山間部を水源として南部から北部へ向って流下し、泉佐野市を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部が他市域を流れることに加えて、本町域が瀬戸内式気候の東端に位置している為に年間降水量が少虽であることから、古くから町域一帯に多く灌漑施設が存在している。特に現在においても町内随所に多くの灌漑用の溜め池を目にすることができる。

今回の調査地点である中家住宅は国道170号線に面し、地形的には現在の住吉川の左岸域に形成された低位段丘上に立地している。この段丘面は熊取町役場前面（「東円寺」推定地）付近が最も高く、北、西及び南方向に向って緩やかな傾斜をもつ段丘面を形成している。

第2節 歴史的環境

本町内の遺跡数は38ヶ所を数えるが、遺跡の範囲・性格等は未だ不明確なものが多く存在しているのが現状である。

中家住宅は昭和39年に重要文化財に指定（母屋1棟・附表門・唐門各1棟）された泉南地方の旧家である中家の居宅であった。母屋と唐門は17世紀の建築と言われ表門も18世紀のものと推定されている。昭和34年には保存のための人幅な解体修理を行ったが、その際母屋の基礎部分にも若干の調査が行われ、その礎石に関しては全く変動の痕跡がないことがわかっている。

周辺の遺跡（第2図）を見てみると、中家住宅（2）と共に中世を考える上で重要なものに降井家屋敷跡（25）がある。中世後期より熊取荘及び近隣の村落を支配していた豪族層である降井家の屋敷地周辺の遺跡で、所在は大字大久保にあり中家住宅の西約500mに位置する。建造物として江戸時代初期の特色を有する書院は、昭和27年に「降井家書院」として重要文化財に指定されている。昭和60年度に



第1図 熊取町の位置

行われた調査では敷地を区画していたと推定される溝を検出している。出土遺物は唐津、伊万里、備前などの16世紀を中心とした陶磁器を検出している。

また、大井山川の対岸に位置する東円寺跡（6）がある。現在のところ東西900m、南北400mを有する町内最大の遺跡範囲となっている。遺跡名となっている「東円寺」（廃寺）は近辺の発掘調査により出土した軒丸瓦や文献から平安時代末期頃に建立された寺院であると推定される。当寺院は、付近の水田に伝えられている「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」等の小字名から段丘面の高位置にあたる現在の熊取町役場の正面域に所在していたと考えられるが、中心部の調査が行われていないために伽藍配置などの正確な把握は未だ為されていない。しかし、近年の度重なる発掘調査により寺院跡としての当遺跡の様相より、それ以前の8世紀代に比定される掘立柱建物群や遺物が検出されている。また、建立以後に成立した13世紀から14世紀にかけての中世集落の様相が徐々にではあるが明らかになりつつある。

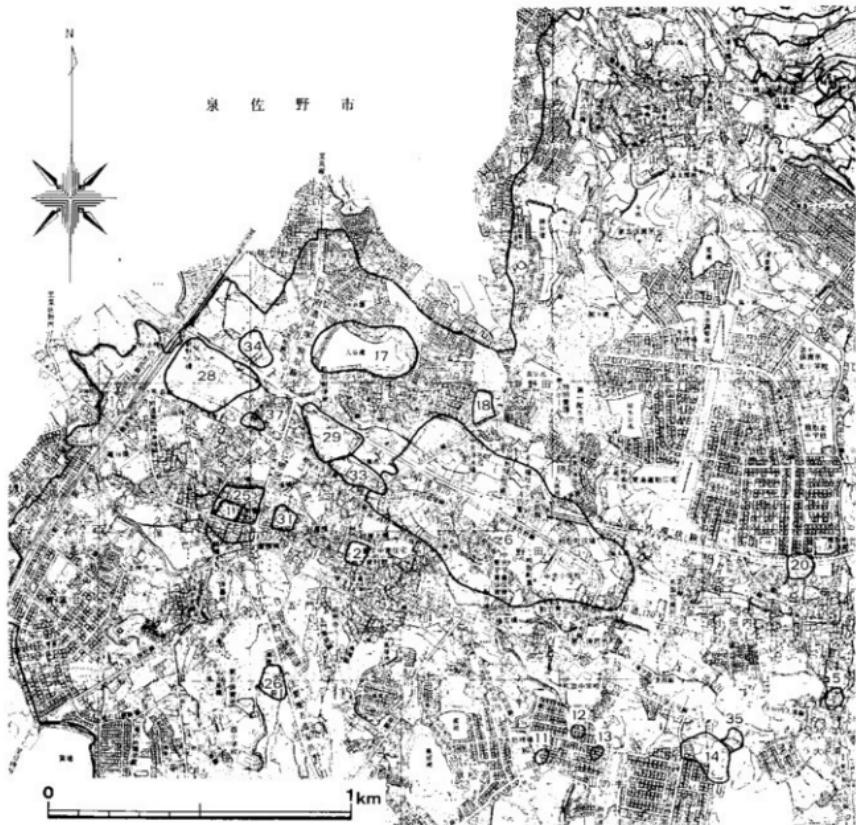
同じ住吉川流域の低位段丘上に立地している、大久保B遺跡（28）、大久保E遺跡（37）は弥生時代後期から終末期頃を継続時期とする遺跡である。大久保E遺跡で終末期頃に比定される遺物が多量に投棄された溝が検出されており、今後の周辺地域の調査で当該期の集落跡が発見される可能性が非常に高いと言える。

第2章 調査に至る経過

第1節 既往の調査（93-1区）

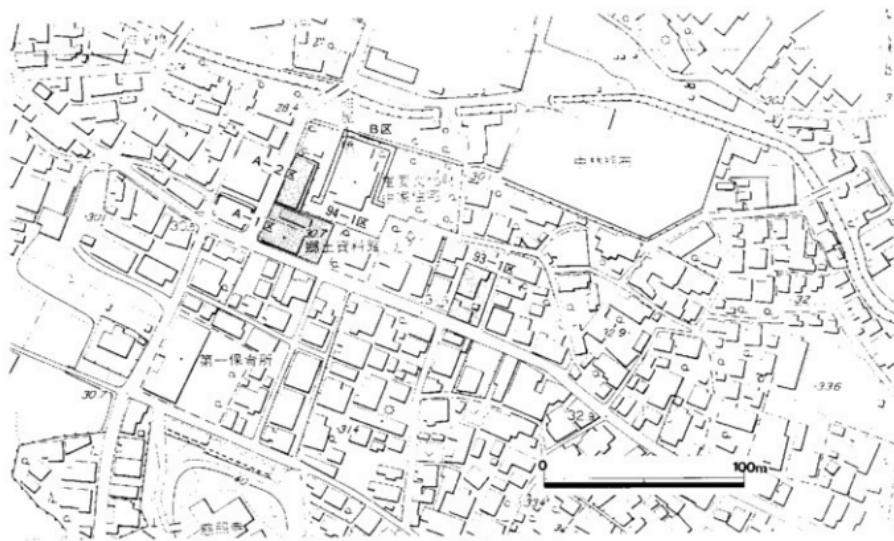
中家住宅は熊取町大字五門に所在し、現在の中家住宅を中心として半径50mの範囲の遺跡である。平成5年度に93-1区が今回の調査地点の東へ約100mの地点で発掘調査が行われている。調査の成果としては、溝1条（SD-1）、土壌3基（SK-1, 2, 3）、埋甕1基（SU-1）、柱穴1基（SP-1）などを検出している。SD-1は幅0.3m、長さ20m、深さ0.2mを測り断面V字状を呈している。埋甕から瓦質の羽釜2点、鉢鉢1点、青磁碗1点、土師質皿2点が出土しており、いずれの遺物も15世紀後半から16世紀前半の年代を与えるものである。SU-1は溝南側に隣接するようにして検出されている。攢乱等によって上部3分の2を失っているが、16世紀後半から17世紀前半に比定され、内面低部に見られる排泄物のような付着物から使所甕として使用されていたものと思われる。上槽に関しては、SK-1は16世紀後半から18世紀前半の瓦や唐津の碗・皿・鉢などの陶磁器片が出土しており、廐棄物の捨て場と思われるものである。SK-2は上槽質の甕の口縁部が一点出土している事や、断面形から推測して埋甕があったものと思われる。SK-3は掘り形が深く底まで掘削することが出来なかつたが、形状から井戸ではないかと推測できる。

この地点の小字名を「元屋敷」といい、古くから屋敷が存在していたことが窺えるが、15世紀以降から江戸時代にかけてのいわゆる造構面が削平を受けている状況なので、当時の建物などの平面配置は正確に復元しえないが、井戸や使所甕と推定される造構が検出される等、この場所が江戸期に入った17世紀代には何らかの屋敷地の一角であった可能性を示しているものである。



- | | | | |
|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 降井家書院 | 2. 中家住宅 | 5. 甲川家住宅 | 6. 東円寺跡 |
| 11. 五門遺跡 | 12. 五門北古墳 | 13. 五門古墳 | 14. 大浦中世墓地 |
| 17. 大谷池遺跡 | 18. 祭礼御旅所跡 | 20. 小垣内遺跡 | 25. 降井家屋敷跡 |
| 26. 大久保A遺跡 | 28. 大久保B遺跡 | 29. 紺屋遺跡 | 31. 大久保C遺跡 |
| 33. 口無池遺跡 | 34. 大久保D遺跡 | 35. 大浦遺跡 | 37. 大久保E遺跡 |

第2図. 中家住宅周辺の遺跡



第3図. 93-1-94-1区 調査区位置図

第2節 調査の契機と経過（94-1区）

熊取町大字五門26-1番地他16筆において、熊取町企画部歴史文化施設整備室より重要文化財中家住宅及び周辺整備の計画がもたらされた。その内容は、中家住宅母屋の防火施設事業における消防設備工事と、中家に隣接する約840m²の敷地（旧資料館及び個人倉庫）に歴史文化施設整備事業における郷土資料館建設工事である。対象地は周知の遺跡である中家住宅の範囲内であり、遺構・遺物の存在が十分に予想される地点であった。そこで、町史編さん室は郷土資料館建設予定地において、平成6年9月18日より同27日（実働6日）の期間に5ヶ所のトレンチ調査を実施し、遺構・遺物・包含層などのデータを収集した。その結果、所々大きく攢乱を受けているところが見うけられるが、地表面下約0.3～0.4m付近において江戸時代後期に比定される瓦や陶磁器を確認し、さらに下層では中世から近世にかけての陶磁器類を発見するに至った。この成果に基づいて関係機関と協議を行い、建物建設予定地において全面発掘を実施することになりました、母屋周りの消防設備工事部分については、工事施工時に伴って実施することとなった。全面発掘調査は町史編さん室が担当し、平成6年11月8日から現地調査を実施した。調査は掘削により生じる堆土置場を確保するため、調査地をA-1（南）・2（北）区と二分割にして調査を進行させた。まず機械による現表土・近代整地層を掘削し、江戸後期の生活面の検出を行った。しかし近代における削平と攢乱によって明瞭な生活面を検出するには至らなかった。つづいて二次生活面にむけて掘削を行い、瓦廃棄土壙・埋甕等の遺構を検出することが出来た。また、中家住宅の母屋周りの地区をB地区として、土師質の大埋甕を検出するに至った。

このような成果を得て、平成7年1月6日をもって実働39日間の現地調査を終了した。引続き町史編

さん室において内業整理及び概報刊行作業を行い、平成8年3月に本書の刊行をもって本調査にかかる作業は終了した。

第3章 調査の概要

第1節 基本層序

本調査地点は住吉川流域に形成された低位段丘上に位置し、現地表面でT.P.約31.5mを測る。調査区内の上層の堆積状況は旧米資料館などの建造物が建っていたために所々基礎が残っており、また、近代の削平・擾乱を受けている部分が多分に見られかなり荒れたものとなっていた。

基本層序は、1 黄褐色系砂質土の現表土、2 黄灰色系砂質土の整地層、3 灰黄褐色系砂質土の整地層、4 明黄褐色系粘質土及び黄橙色系砂礫土の無遺物層である。

第1層は、近現代の盛土で礫を含む砂質土で層厚およそ0.3~0.4mである。第2層は、近代の整地層と思われ、新しいガラス片などが混入していた。層厚はおよそ0.1m程度である。第3層は、近世の整地層で江戸時代末期頃に比定される瓦片を含んでいる。この第3層の上面を近世の生活面としてとらえた。層厚はおよそ0.15m程度を測る。第4層は無遺物層で地山としてとらえた。地山となる層は、明黄褐色粘質土層と黄橙色砂礫土層の2つに大別できる。前者はA-1区東側で地山の標高が高い箇所に認められる。A-1区北側では明黄褐色粘質土層の下層に黄橙色砂礫土の存在が認められることから、明黄褐色粘質土層の存在しない箇所は削平の結果ともとらえられる。また、A-1区南側、A-2区東側などでは、近世における整地による削平を受けずにそれ以前の土層堆積が確認できる。その層序は、上からⅠ表土、Ⅱ灰白色砂質土層の旧耕作土、Ⅲ橙色砂質土層の旧床土、Ⅳ灰黄褐色砂質土層の整地土となっており、層厚はそれぞれ5cm程度である。その下層で無遺物層の地山に達する。

第2節 遺構

今回検出した遺構は、土壤(SK)30数基、ピット(SP)20数基、埋甕(SU)2基、性格不明土壤(SX)2基である。土壤は一辺が5mを超えるような大型のものから溝状のものまで様々であるが、その中で特徴的なSK04は瓦の廃棄土壤で、平面形を見ると0.9×0.4mで定規で線を引いたかの様に整然としており、埋納の様な感じを呈するものである。もう一つは、二重円形のリング状土壤と呼ばれているもので從来「土壤墓」であるとか「樹木抜去痕」と言うようなものであると考えられている。SK08、09、10がリング状土壤であり、当初前紀のような用途を考えていたが詳細に観察するとほぼ真円に近い平面形を呈しており、慎重に掘り下げていくと埋桶と思われる木片が部分的にではあるが残存していた。ピットは20数基検出しており径が0.4~0.1mと大小の法量が認められるが、明瞭な柱痕を残すものではなく柱穴であると断定できるものはないと言わざるを得ない。法量が0.1m前後的小ピットは杭穴であると推定される。埋甕は2基検出しているが、1基はA-1区で陶質、もう1基はB区で土師質の甕である。SX21、22は平面形およそ3.6×3.6m、3.6×3.4mの方形を呈しており、底から大きさ一辺0.3m程度の石が並んで出土したことから埴物跡とも考えられる。全体の概要は以上の様なものであるが、次に主要な遺構について略述する。

A-1区 SK05 (第4図・図版第4)

調査区の中央南端で検出した。平面長方形の土壌で検出面での法量は $2.5 \times 2.6\text{m}$ 以上を測る。南側を擾乱によって切られているため全体像はつかめないが、かなり大型の土壌である。断面は検出面から最深部で 0.2m を測り、にぶい黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土がレンズ状に堆積する。土壌内から150片以上にも及ぶ多量の瓦が出土しており、瓦の廃棄のために掘削されたものだと推測することができるが、整然とした平面形を持つことから廃棄と言うよりは埋納したものであると考えられる。出土瓦の年代は江戸時代末期と比定され、特に19世紀代の陶磁器が出土している事から投棄された時期は19世紀以降頃と推定される。

SK07 (第4図・図版第4)

調査区南辺や東寄りの地点で検出した。平面形は、南壁にかかる為およそ半分しか検出できなかつたが、推定円形の土壌では径は 3m を超えるものと思われる。断面はまっすぐ内側に落ち込み、底部は平坦となっており、深さは 0.9m を測る。埋土は褐灰色粘土混砂質土一層である。その規格された様な平面形と、常に湧き水があったことから、井戸として使用されていたと推定した。しかし出土遺物が一切含まれていないこと、深さが上面が切られてはいるが 0.9m と浅いこと、埋土が一層のみで特徴的な滞水していた痕跡が明瞭には見られないことから疑問の余地も残されている。機能していた時期は出土遺物がないため不明と言わざるを得ないが、上壌上面が江戸期の整地層ではなくそれ以前の耕土と思われる層に切られていることから中性に潮る可能性も考えられる。

SK08 (第4図・図版第4)

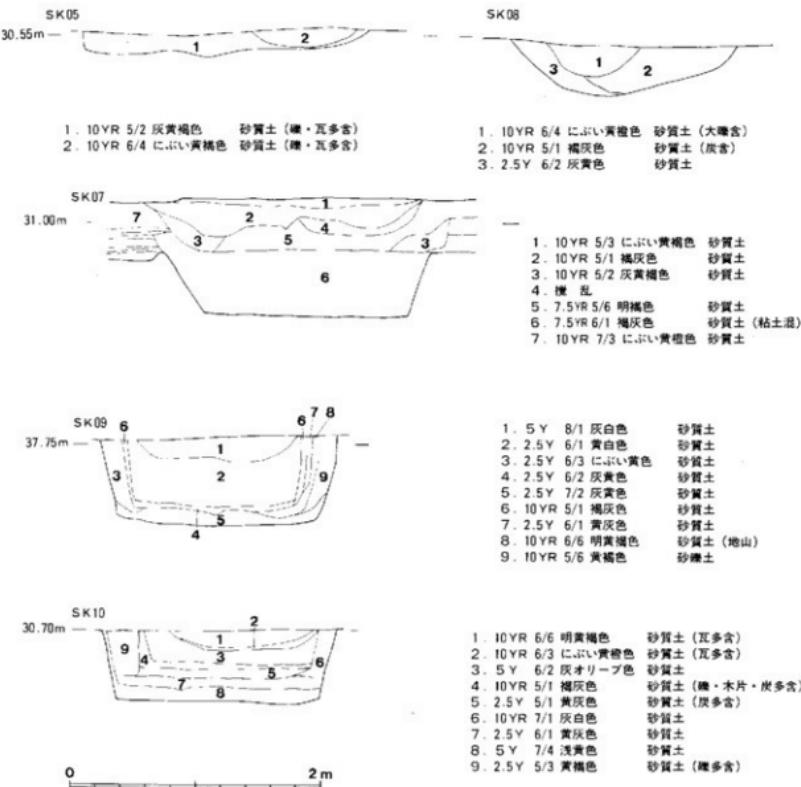
調査区の北東、SK10の南 1m の地点で検出した。平面形は二重円形で外環長径 0.9m 、短径 0.6m の楕円形で、内環は 0.38m のほぼ真円である。平面形はレンズ状を呈し、最深部で 0.2m を測る。埋土は外環部が褐灰色砂質土と黄灰色砂質土で、内環部がにぶい黄橙色砂質土を呈している。出土遺物は江戸時代後期に比定される瓦片が若干出土している。リング状の土壌で内環がほぼ真円を呈していることから埋桶等のものが存在していたと考えられるが、埋桶自体全く残存しておらずまた、SK09・10などと比較すると規模も小さく、断面形態も全く異なることから単に楕円形の土壌の上から円形の土壌が掘込まれたものである可能性も考えられる。

SK09 (第4図・図版第4)

調査区の北東隅で検出した。平面形は二重で外環円形、内環はほぼ真円のリング状土壌である。検出面での径は外環 1.92m 、内環 1.60m を測る。垂直に落ちる壁面を持ち、深さは 0.7m である。第4層では厚さ $2 \sim 3\text{mm}$ 程度の木板片がかなり腐朽しているものの部分的に残存しており、埋桶が存在していたものと思われる。埋桶だと推定すると残存高 0.57m 、残存上部径 1.4m 、底部径 1.25m を測る。上面が削平されていることと、埋桶自体がかなり腐朽している事に加えて部分的にしか残存していないため取り上げることは出来ず、形状・組成などの詳細は不明である。埋土は桶内が明黄褐色、にぶい黄橙色砂質土で瓦や土製の壁もしくは塀の土塊を多量に含んでいる。これは埋桶として機能しなくなった後に瓦や土塊の廃棄坑になったものと推測できる。裏込めの土からは遺物が出土しないことから埋桶として機能していた時期は不明と言わざるを得ないが、桶内出土瓦の年代観から廃絶した時期は江戸時代末期頃と推定されるので、それ以前とすることになるだろう。

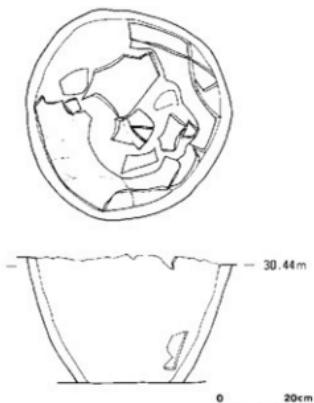
SK10(第4図・図版第4)

SK09の西隣0.3mの地点で検出したリング状土壌である。平面形はSK09とほぼ同様で、検出面での径は外環1.85m、内環で1.44mを測る。断面の様相はSK09とかなり酷似しているが、深さは0.5mのと若干浅めである。しかし埋桶は残存しておらず、取り上げた後に廃絶したか、もしくは完全に朽ちてしまったかであろう。そのため、埋桶自体の詳細は一切不明であるが平面形、断面形から推測するとSK09とほぼ同規模のものだったと思われる。第3層の埋土からSK09と同様の瓦が出土していることから、後に瓦の廃棄坑となり、機能していた時期、廃絶した時期も同時期程度と推定できる。また用途もSK09と同様資料不足のため不明と言わざるを得ない。



第4図 A-1区遺構断面図

SU-01 (図版第4)



第5図. SU01出土状況図

A-2区 SK22 (第6図・図版第5)

調査区の南東隅の地点で検出した。平面形は $1.5 \times 1.9\text{m}$ の楕円形を呈しており、断面形は逆台形で深さ 0.2m を測る。ただし、上面は削平されていることが考えられる為に、実際はもっと深かったものと推測できる。埋土は褐灰色砂質土、黒色砂質土、暗灰黄色砂質土である。出土遺物は陶磁器片約40点、瓦10数点、その他上製の壁もしくは塙と思われる土塊が出土している。いずれも18世紀後半から19世紀以降に比定されるものである。この出土遺物の量から見てその用途は廃棄土壙と考えてよいだろう。

SK-27 (第6図・図版第5)

調査区の南東隅で、SK22の南側およそ 1.5m の地点で南壁に半分かかって検出した。平面形は不定形で大きさ $3.8 \times 1.8\text{m}$ 以上を測る。断面も部分的に擾乱されており、不定形を呈する。埋土は暗灰黄色砂質土、明黄褐色砂質土で出土遺物は17世紀中頃に比定される唐津皿を含む陶磁器片約10点、瓦片約20点、石臼2点、SK22と同様の上魂が出土している。用途は廃棄土壙と考えてよいだろう。



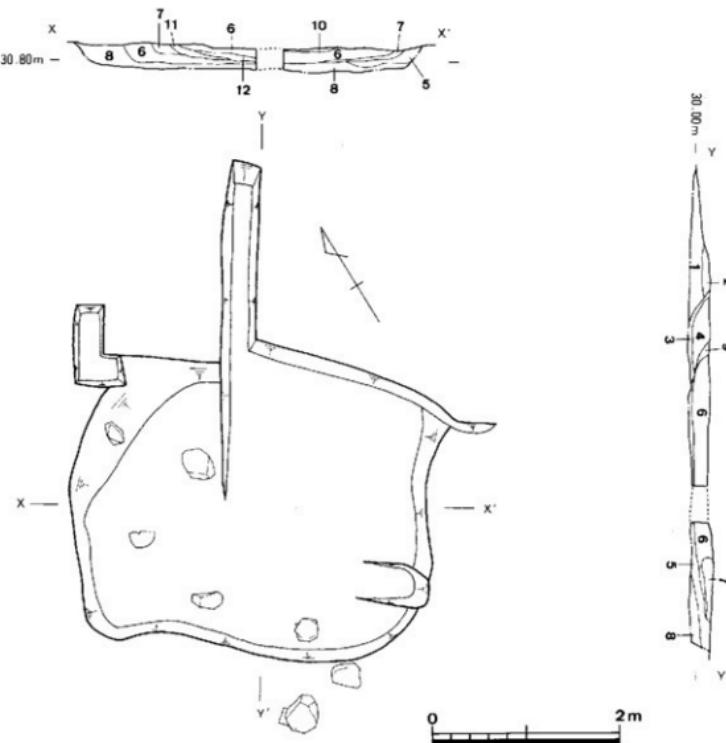
第6図. A-2区造構断面図

調査区南東端で検出した。壺は陶質で黒褐色の釉に白濁釉が渦巻状に化粧掛けされている。残存高はおよそ 53cm で復元しても 60cm は超えないものと思われる。その内およそ半分の 32cm が地山に埋まった状態で検出した。しかし上部のおよそ 20cm は削平のためか破片化しており、また失われており検出することは出来なかった。用途は陶質の壺であること、便所窓特有の付着物が見られないこと等から、水壺等として使用されていた可能性が考えられる。

地山の標高は 30.3m を測り、その上には本来中世期やそれ以前の土層が堆積していたと考えられ、母屋の礎石は現在の地表面に並んでみられるが、その標高は 31.5m である。両者の比高差は 1.2m となり中家住宅の母屋の変動がないとすれば、埋壺はかなり低位置に埋設されていたことになる。

SX21(図版第5)

調査区北端で検出した。平面形は $3.6 \times 3.4\text{m}$ のやや歪な方形を呈しており、深さは 0.15m を測る。遺構内から一辺 $0.3\sim 0.4\text{m}$ 程度の石が8点ほど出土し、礎石と考えられ、平面形態からも建物跡ではないかと思われる。しかし礎石と思われる石は変動しているのか並び方は不規則であり、詳細は不明である。また、埋土に焼土が含まれていることから火災により消失したものと考えられる。出土遺物は17世紀代に比定される瀬戸・美濃の大目茶碗、上脇質の皿、その他瓦片2点、上製の壁もしくは塀と思われる土塊が出土している。

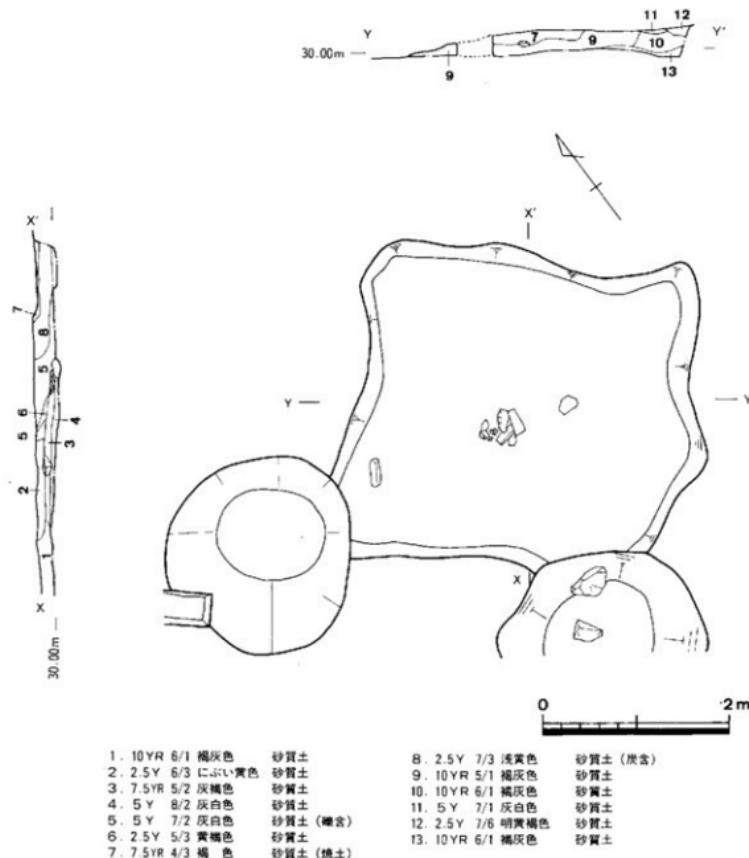


1. 2.5Y 7/6 明黄褐色	砂質土(地 山)	7. 7.5YR 4/3 棕 色	砂質土(燒 土)
2. 10YR 7/1 灰白色	砂質土(炭 含)	8. 2.5Y 6/4 にぶい橙色	砂質土(鐵多含、地山)
3. 7.5YR 7/1 明褐灰色	砂質土	9. 2.5Y 6/1 黄灰色	砂質土
4. 5Y 7/3 淡黄色	砂質土	10. 2.5Y 5/4 實褐色	砂質土(炭・鐵含、燒土)
5. 5Y 7/2 灰白色	砂質土(鐵 含)	11. 2.5Y 8/5 黄 色	砂質土(燒 土)
6. 2.5Y 7/3 淡黄色	砂質土(炭 含)	12. 2.5Y 8/1 灰白色	砂質土(燒 土)

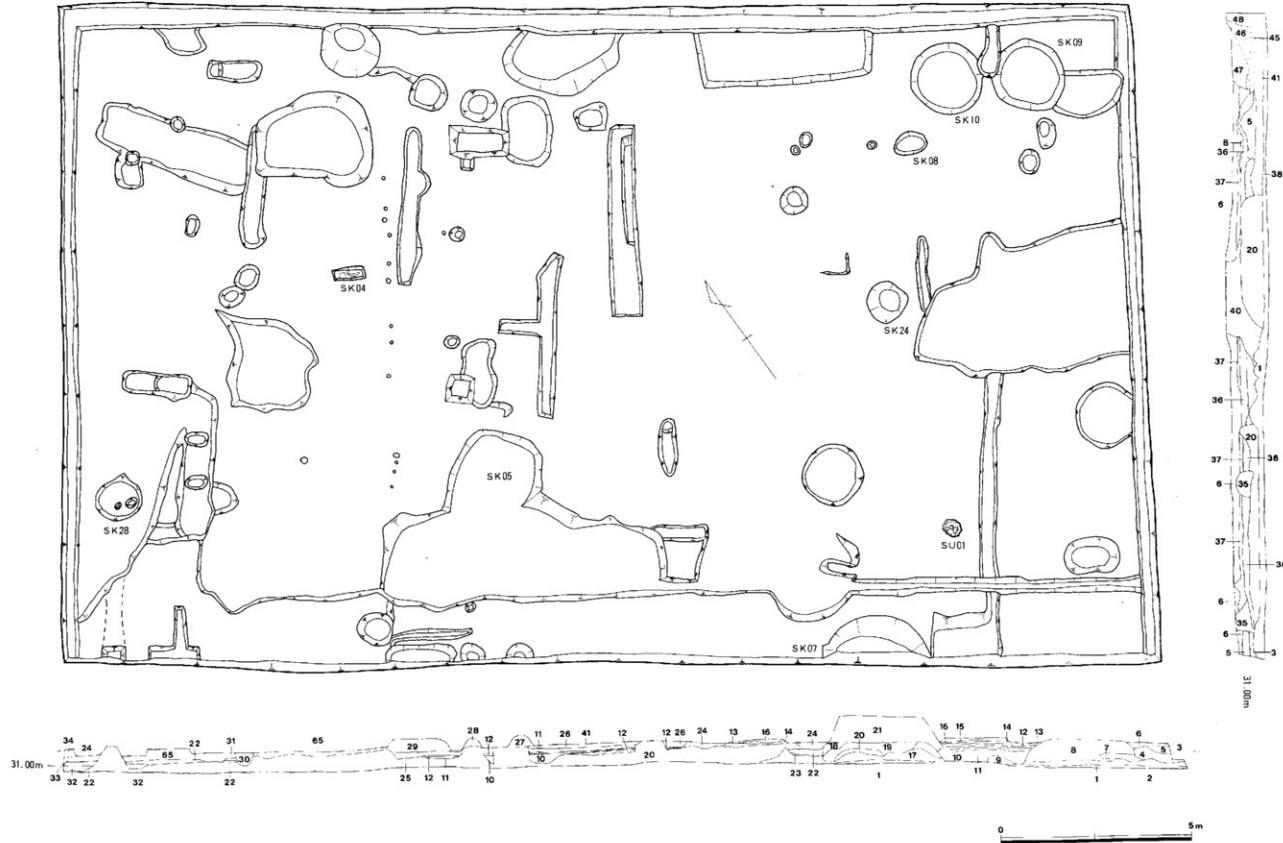
第7図. SX21平面図・断面図

S X22 (図版第5)

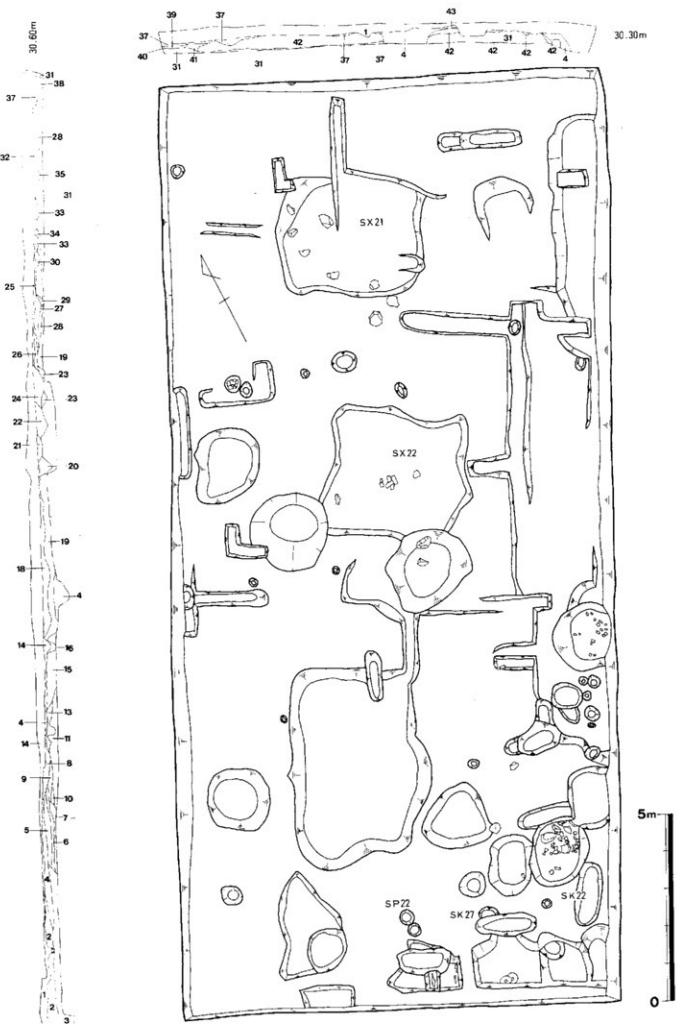
調査区のほぼ中央で検出した。平面形は一辺3.6m四方のやや歪つな方形を呈しており、深さはおよそ0.15mを測る。S X21と同様に一辺0.2~0.3mの石が出土しており建物跡と考えられる。S X21同様埋土に焼土が含まれる。他の出土遺物は16世紀末から17世紀初頭に比定される備前の壺片、土師質の皿などを含む陶磁器片3点、瓦片が1点出土している。



第8図. S X22平面図・断面図

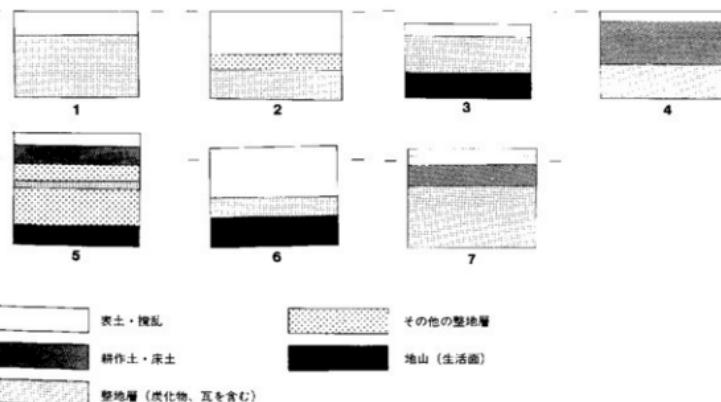
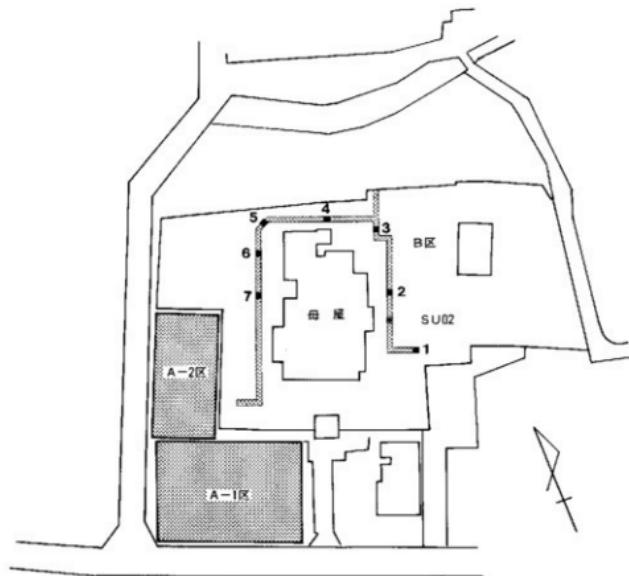


第9図. A-1区. 平面図・断面図



A-1区		A-2区	
1. 10YR	5/3 にい 黄褐色	砂質土 (表 土)	1. 10YR 5/6 黄褐色
2. 2.5Y	6/1 黄色	砂質土	2. 2.5Y 7/6 明黄褐色
3. 3Y	7/4 灰白色	砂質土	3. 2.5Y 5/2 塗灰褐色
4. 10YR	7/2 にい 黄褐色	砂質土	4. 混 亂
5. 2.5Y	8/1 灰白色	砂質土 (木の根あり)	5. 2.5Y 6/2 灰褐色
6. 10YR	6/8 明黃褐色	砂質土 (地 山)	6. 2.5Y 5/1 黄褐色
7. 10YR	5/1 灰白色	砂質土	7. 10GY 6/1 黄褐色
8. 10YR	7/2 にい 黄褐色	砂質土 (粘土ブロックをまじ)	8. 2.5Y 7/2 黄褐色
9. 10YR	6/7 にい 黄褐色	砂質土	9. 2.5Y 7/2 黄褐色
10. 10YR	7/3 にい 黄褐色	砂質土 (旧耕作土)	10. 5BG 7/1 明灰褐色
11. 10YR	7/1 灰色	砂質土 (床 土)	11. 10YR 6/4 にい 黄褐色
12. 7.5YR	6/5 灰 色	砂質土 (堅地層)	12. 2.5Y 6/2 灰褐色
13. 10YR	6/2 灰褐色	砂質土	13. 10YR 6/3 にい 黄褐色
14. 7.5YR	6/1 灰褐色	砂質土 (マンガン斑あり)	14. 2.5Y 6/2 灰褐色
15. 7.5YR	5/2 灰褐色	砂質土	15. 2.5Y 6/2 混灰褐色
16. 10YR	8/3 混灰褐色	砂質土 (地 山)	16. 2.5Y 6/2 混灰褐色
17. 10YR	5/1 混灰褐色	砂質土	17. 2.5Y 6/3 にい 黄褐色
18. 10YR	5/2 混灰褐色	砂質土	18. 10YR 6/2 灰褐色
19. 7.5YR	5/6 明褐色	砂質土	19. 2.5Y 6/3 にい 黄褐色
20. 混 亂			20. 10YR 5/2 灰褐色
21. 7.5YR	6/1 灰褐色	砂質土 (粘土層)	21. 10YR 5/2 灰褐色
22. 10YR	5/2 灰褐色	砂質土	22. 2.5Y 7/3 黄褐色
23. 2.5Y	6/3 にい 黄褐色	砂質土	23. 2.5Y 7/3 黄褐色
24. 2.5Y	7/2 灰白色	砂質土	24. 2.5Y 5/2 塗灰褐色
25. 2.5Y	7/2 混灰褐色	砂質土 (耕作土)	25. 2.5Y 5/3 黄褐色
26. 7.5YR	5/1 海灰色	砂質土 (海綿)	26. 7.5YR 5/1 灰褐色
27. SK21埋土			27. 2.5Y 6/3 にい 黄褐色
28. SK20埋土			28. 10YR 5/2 混灰褐色
29. SK19埋土			29. 2.5Y 4/2 混灰褐色
30. 10YR	5/6 黄褐色	砂質土	30. 2.5Y 4/2 混灰褐色
31. 10YR	4/2 混灰褐色	砂質土	31. 2.5Y 7/6 明黃褐色
32. 10YR	5/1 混灰褐色	砂質土 (木の根あり)	32. 2.5Y 5/2 地灰褐色
33. 10YR	6/1 灰白色	砂質土	33. 10GY 6/1 灰褐色
34. 10YR	6/8 明黃褐色	砂質土 (地 山)	34. 2.5Y 6/1 黄褐色
35. 2.5Y	7/1 灰白色	砂質土 (草多含)	35. 2.5Y 7/8 黄 色
36. 10YR	6/1 灰褐色	砂質土	36. 10YR 6/4 にい 黄褐色
37. 10YR	5/3 にい 黄褐色	砂質土 (木の根あり)	37. 10YR 6/4 黄褐色
38. 10YR	6/1 灰褐色	砂質土 (木の根・瓦含)	38. 10YR 4/2 混灰褐色
39. 10YR	6/1 灰白色	砂質土 (木の根)	39. 10YR 3/2 黃褐色
40. 10YR	7/1 灰白色	砂質土	40. 2.5Y 7/4 混灰褐色
41. 10YR	5/1 灰褐色	砂質土 (草多含)	41. 10YR 5/3 にい 黄褐色
42. 10YR	7/1 灰白色	砂質土	42. 10YR 5/3 にい 黄褐色
43. 2.5Y	7/1 灰白色	砂質土 (木の根あり)	43. 7.5YR 5/6 明褐色
44. 10YR	5/2 混灰褐色	砂質土 (マンガン斑あり)	
45. 10YR	6/1 灰褐色	砂質土 (瓦 含)	
46. 2.5Y	6/1 黄褐色	砂質土 (瓦 含)	
47. 2.5Y	8/1 灰白色	砂質土 (堆多含)	
48. 2.5Y	7/1 灰白色	砂質土	

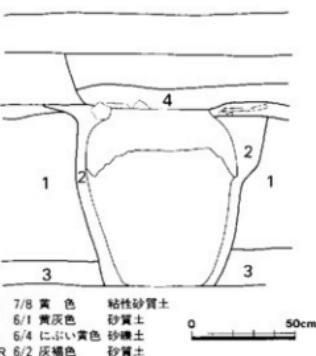
第10図. A-2区 平面図・断面図



第11図. B区調査位置図・柱状断面図

B区 SU02 (図版第5)

母屋の東側およそ5mの地点ではほぼ完全な状態で検出した。土師質の大甕で、法量は器高84.2cm、口縁部36.3cm、底部径25.0cmを測るかなり大きいもので、内部に便所蓋特有の付着物の様なものが認められる為に糞尿用と推定した。甕の口縁部と当時の生活面はほぼ一致すると思われ、標高30.9mを測る。すぐ隣の母屋の生活面と比べると0.6mの比高差がある。A-1区の埋甕と比べると、ほぼ同じ値を示している。母屋の基礎には変動の痕跡がないので現在の生活面から0.6mとかなり深い位置に埋設されていることから考えると、現在の中家住宅創建以前の遺構とも考えられる。



第12図 SU02断面図

第3節 遺物

出土した遺物はほとんどが遺構内からのものであり、コンテナに換算しておよそ20箱を数える。その大半は近世の陶磁器片と瓦片である。中には中世の瓦器、土師器、東播系須恵質土器、土製の錘、青磁などと、奈良時代に比定される須恵器が存在していた。ただし、いずれの遺物も細片化しており、量的にも僅かである。以下個々の遺物について略述する。

肥前系磁器染付碗 (第13図1~8)

全て手描きによる梅樹文および網目文の施文を行っており、また内面底部の処理技法は、内面総釉のものと、見込み部分を蛇の目状に釉剥ぎしているものと2種類が存在している。

1・2・8は内面総釉であり、外面1は梅樹文、2は雪持ち筆文、8は二重網目文である。また1・2は高台内に判読不明の銘を有する。

3~7は、外面は梅樹文の染付、見込み部を釉剥ぎし、釉剥ぎ部に重ね焼き痕が残っている。

肥前系磁器染付皿 (第13図10・11)

共に蛇の目凹形高台で、蛇の目状に釉剥ぎを行ってある。10は高台内に「太明年製」の銘を有し、11は口縁部に口銷を施している。

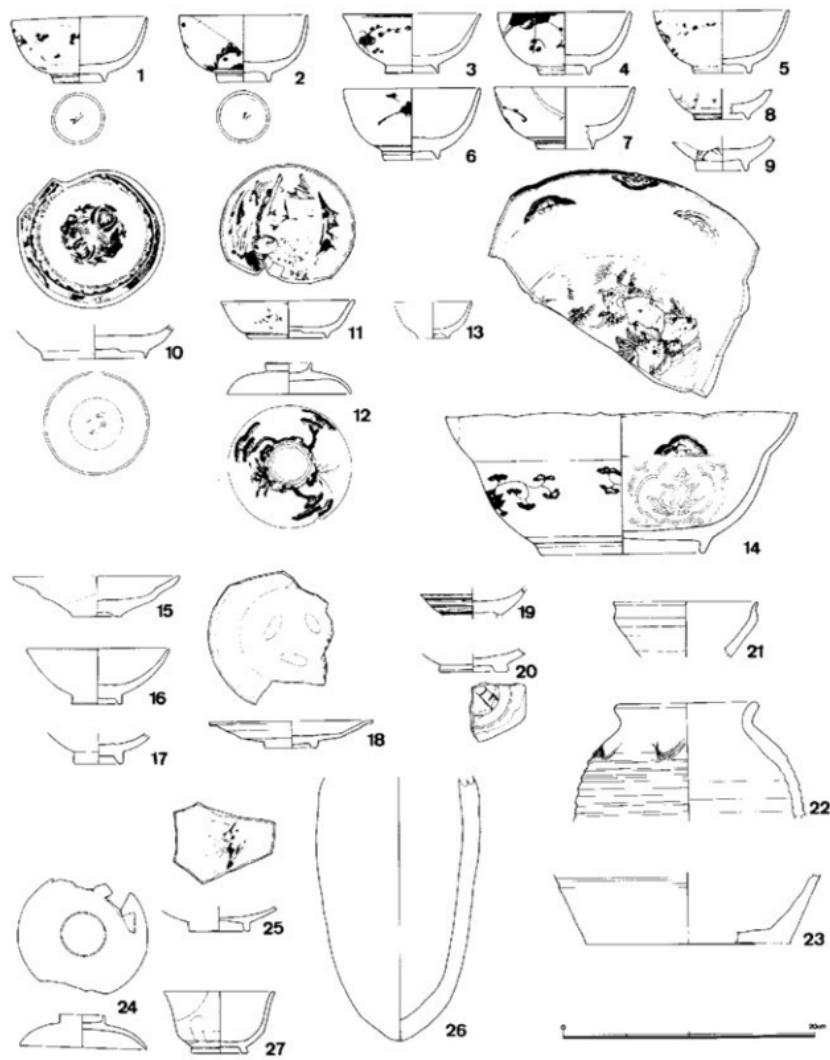
その他の肥前系陶磁器 (第13図9・12~14)

9は白化粧土による刷毛目の陶器である。内外面共にいわゆる雲刷毛目を施している。

12は蓋で外面に松文を染付している。13は盃で内外面共染付は施していない。14は輪花の鉢で高台内に一重圓線を巡らし、福字の底裏銘を有する。

唐津系陶器 (第13図15~20)

15は内面総釉の碗で見込みに砂目跡が4ヶ所残っている。外面は上位の部分的に釉が掛かっている。16・17は内野山西窯系の鈍緑釉を施釉する碗で、高台部露胎、見込み部に蛇の目釉剥ぎを行っている。

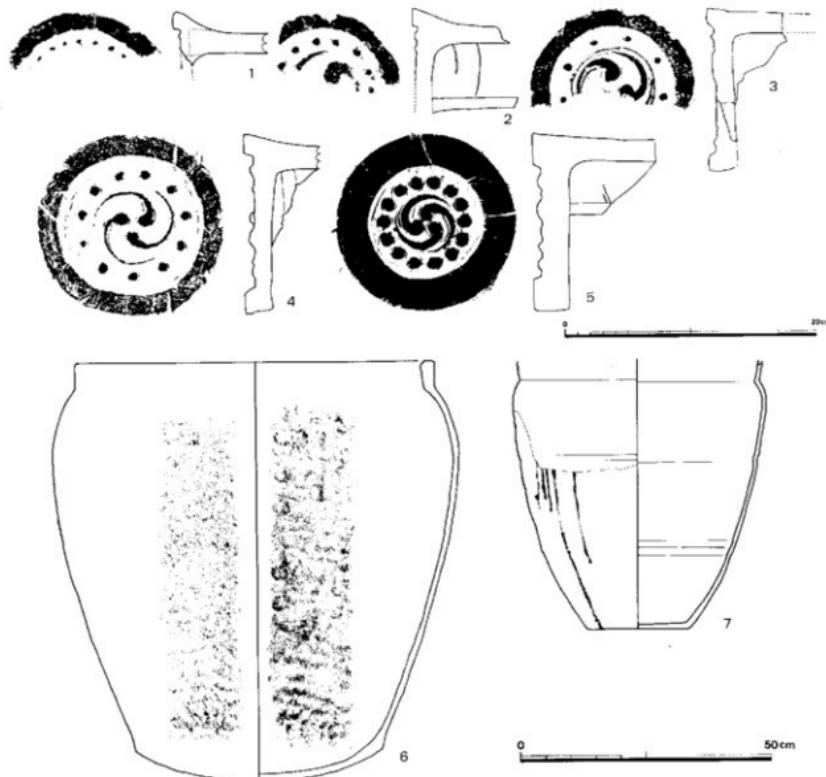


第13図 出土遺物

18は折れ縁の皿で白濁釉が施され高台及びその付近は露胎である。見込み部に砂目跡が3ヶ所残っている。高台は兜巾高台を呈している。19は白化粧土による内外面刷毛目装飾を施す碗である。20は内面総釉、外面高台部は露胎である。また高台内に判読不明の墨書が見られる。

その他の遺物（第13図22～27・第14図1～7） 21は瀬戸・美濃系陶磁器天目茶碗である。口縁部から胴部にかけて褐釉がかかり以下露胎である。22は備前の壺で、肩部に波状文を施し、内外面部分に自然釉が掛かっている。23は丹波壺の底部である。24・25は肥前系京焼風磁器で、24は蓋でつまみ部のみ露胎で内部にくずした「清水」の刻印を有し、25は見込み部に染付を施している。26は砲弾型の土師質鉢壺である。27は関西系と呼ばれている壺で、胴部に楕円形の無釉部が数ヶ所ある。

第14図1は鳥衾である。2～5は巴文軒丸瓦で、巴の巻き込む方向は2・5が右、3・4が左方向である。また珠文数は4が11個、5が14個である。6・7は前述の埋甕である。



第14図. 出土遺物

以上簡単ではあるが個別に説明してきたが、次にその全体の年代観について言及してみる。

今回の発掘調査で出土した遺物の約半分以上瓦が占め、残りが近世の陶磁器である。年代的に大別すると、4 時期に分けることが出来る。16世紀末から17世紀初頃の鳥食や備前窓、17世紀前期から中頃の唐津碗・皿や軒丸瓦、18世紀代の肥前系磁器、そしてその他大半は19世紀以降と思われる丸・平瓦や陶磁器で占められている。中家住宅創建当時と思われる17世紀代の瓦は僅か数点のみ出土しただけである。

今回多量に出土した19世紀以降の瓦を除くと次に出土率が高いのは陶磁器であるが、その中でも肥前系の磁器が取り分け多く出土している。その特徴としては、いわゆるくらわんか手といわれるもので、丸碗のみの出土で筒型碗・端反碗等は見られなかった。また装飾的には、簡略化された梅樹文を手書きで施したもののみでコンニャク印版を用いたものは見られなかった。また内面処理法は、内面総釉のものと蛇の目状に粗削ぎしたものが半々程度に存在する。さらに高台内部に判読不明ではあるが底裏名を有するものも存在する。また二重網目文碗は内面無釉のものが一点ではあるが出土している。これらから18世紀前期から中期頃という時期が与えられるだろう。この時期の遺物が多量に出土すると言うことは、18世紀半ばに大幅な解体あるいは増改築工事が行われたものと推測できる。

その他に多量に出土するのが19世紀以降の雑多な陶磁器類及び瓦であり、恐らくこの時期に大幅な解体・規模縮小等が行われたものと思われる。

以上のように出土遺物から人別して4 時期に分けることが出来たが、17世紀から19世紀の間に最低4回の増改築・解体などの変動があったことが推測できるが、中家住宅創建当時と思われる17世紀代前期から中期頃の遺物は数点しか出土しておらず創建時期等、詳細な起源を探る事はできず、今後の調査・研究を含め課題と言えるだろう。

第4章 まとめ

今回の調査地点は、狭小ながら母屋から3～4mしか離れていない地点と隣接する地点の調査と言うことで中家住宅の起源に迫ることが出来るかも知れないという期待があった。現在残っている古い建物は、母屋とそれに接続する座敷、唐門及び表門のみであるが、往古の図（年代未詳・第14図）を見ると、他に客室と思われる大きい棟、長屋、馬屋、その他付属の建物があり、またその周囲には堀や塀で囲まれた堂々たる構えをしのばせている。しかし、明治五年の図によると、敷地が大幅に縮小され多くの建物が撤去されているようである。このような豪壮な建築は他に例を見出し難くその原形は細部にわたり種々な点で古い形式を示しているので桃山調をとどめており、江戸時代初期を降らない時に建てられたものではないかと考えられている。しかしこの現存する母屋や座敷については、古図に見えてるものと間取りの外廓は一致するものの、内容はかなり変更されており、また実物についてもかなりの改造が指摘されている。しかし、その礎石に関しては一部抜き取られているものはあるが、その他は3～10cm程度の沈下はあるものの変動は見られないようである。

さて、前章まで歴史文化施設整備事業における郷土資料館建設工事及び重要文化財中家住宅防火施設事業における消火設備工事に伴う中家住宅94-1^丁発掘調査の概要を述べてきたが、その調査成果を基に古図や文書と照らし合わせながら考察し、まとめを述べてみたい。

先ず今回の調査成果をまとめてみる。

①中家住宅母屋から15m程東の地点（A-2区）において礎石と思われる石を検出し、建物跡と推定される遺構を検出した。

②母屋から3、4mしか離れていない地点（B区）で便所廐と思われる埋甕を検出した。

③A-2区においてリング状土壙6基を検出し、それが埋桶であると推測できること、但し桶そのものが検出できたのは2基だけである。

④遺物において16世紀末から17世紀初頭、17世紀中頃、18世紀前半から中頃、19世紀以降の4つの時期に比定される陶磁器類及び瓦が多数出土している。

以上の4つが挙げられる。以下に各々の問題点等述べてみる。

①については、若干の問題がある。その検出地点を古図と照らし合わせてみると、その地点に建物などが建っていた形跡は両古図（年代未詳・明治5年）において該当する建物は見られないと言うこと。これは、その検出した地点の標高が現在の中家住宅が建っている地表面と比べると、1.20mも低い地点であることを考えるとその古図が作成される遅か以前もしくは以後に建てられたものであるとも考えられる。また礎石と考えられる石も正確に並んではなく、これは後世に移動したことが多分に考えられるが、石そのものが小さく、平坦でないためあまり礎石として向いていないものがある。特にS X22で検出したものはそうである。前章ではS X21・22を建物跡として推定したが以上のことにより、疑問の余地があることを付け加えておく。

②については、廐内部に便所廐によく見られるような付着物があることから便所廐と推定したが、科学的分析をしたわけではないのでそう断定できるものではなく、水甕、藏骨器などの可能性も考慮しなければならない。この出土地点を古図と照らし合わせてみると真上もしくはすぐ隣に付属の建物が存在することが両古図より読み取れる。しかし当時の生活面は埋甕の口縁部の標高と同じ程度であり、その上に45~50cm程度の江戸末期の瓦を含む整地層が存在しその上に中家住宅が建っているのである。この埋甕が確実に便所廐として使用されていたとすると、中家住宅創建以前に埋設されたものとも考えられる。

③については、リング状土壙は從来「樹木抜去痕」であるとか「土壤墓」であると言われ正確にその性格は位置付けられておらず、今後の調査成果に期待するものである。しかし、今回A-1区で検出したリング状土壙は前記の性格には当てはまらず埋桶であることが判明した。それはSK09においては検出した平面形を詳細に観察すると内環部がほぼ真円に近い形状で検出したこと、また慎重に掘下げて行くと厚さ2~3mm程度の薄い板状の木片が僅かではあるが残存していた。しかし部分的にしか残存していないこととかなり腐朽しているため詳細な桶の形状・組成等は確認することは出来ない。桶であったであろう部分を推定して復元してみると、検出面での口径1.40m、底部径1.25m、深さ0.25mとなる。SK10はSK09のすぐ隣で並んで検出した。平面形、断面形共にSK09とかなり酷似しており、同時期に埋設されたものと思われる。しかしSK10からは木片は出土していない。これは恐らく完全に朽ちてしまったかもしれないが抜き取ってしまったかであろう。桶を推定復元すると検出面での口径1.39m、底部径1.28m、残存高0.30mである。また、前章では埋桶が廐絶した後に、瓦の廐棄坑へと転換した様であると推測したが、そうでなく元々瓦を埋納するために埋められた桶である、という可能性も考えられる。

この2つの他にSK08・24・28、SP22もリング状土壙の形態をとるが、いずれもSK09・10と比べると規模はかなり小さく、断面形もかなり異なったものになっており詳細は不明と言わざるを得ない。

SK09・10を検出した地点を占岡（年代未詳）と照らし合わせて見ると、門長屋が存在していた場所もしくはそれに隣接した場所になる。しかし埋桶が機能していた時期はおおざっぱに明治末期以前としか言えずまた、用途も不明であり門長屋と関係付けることはいちがいに出来ない。

④について今回出土した遺物を見てみると若干古代、中世の遺物も出土しているがほとんどが近世の陶磁器と瓦であった。これは中家住宅建築の際に大幅な土地造成を行って削平されたものと思われる。古代・中世の遺物を除けば一番遅り得るものは16世紀末頃に比定される備前の壺である。中家住宅が成立したのがその建設様式から桃山期から江戸期にかけての時期と推測されることを考えるとこの考古学的成果と一致することになり、中家住宅の年代観を裏付けるものである。また出土遺物が大きく分けて半世紀毎の4つの時期に区分することができ、その位のベースで増改築あるいは廃絶していたものと推測できる。

以上が今回の調査成果のまとめである。中家住宅の起源を建築様式・文献にある様に、16世紀末から17世紀初めに求め得る成果を挙げることが出来た。しかし一つ疑問に残るのが現在の生活面と当時の生活面である。若干の削平があるとしても比高差が60cm以上あるのである。そして地山の上層では19世紀以降に比定される瓦が大量に出土しているのである。

此の事が何を意味しているのか推測するに、中家住宅建築当時の地山のうえに60cm以上の整地作業を行って建築もしくは改築・移築したものと思われ、その後母屋周辺地域を解体等を行った際に廃棄物等を投棄したものと考えられる。またあるいは、中家住宅母屋を19世紀以降に土地の造成作業を行い、引き家等の建築工事が行われたとも考えられる。

また中家文書から考察を加えてみると、中家には15世紀初頭から近世にかけて約千点にも及ぶ田・畠・屋敷地・山林などの売券が残されており、16世紀には熊取荘内で優位の地位を占めており、かなりの勢力をもっていたことがわかっているが、天正12（1584）年12月25日付から天正17年5月24日付までの間約4年半の期間の売券が存在しない。後世にその部分が散逸したことは考えられず、その間中家の活動は停滞していたと考えられる。これは天正13年の秀吉の根来寺攻めの際に中家ゆかりの成真院は破却されたと考えられている。このことから考えられるのは天正13年の秀吉の根来寺攻めのおり、中家を含む和泉36郷土として根来の泉南地方守護隊として出兵している事から、その時に中家住宅を含む熊取の主な建物が破壊・消失したとも考えられ、それ以降に中家住宅が再建されたことは十分に考えられる。

いずれにしても中家住宅の真下を調査しなければはっきりしたことは言えずこれは今後の課題といふ。

参考資料

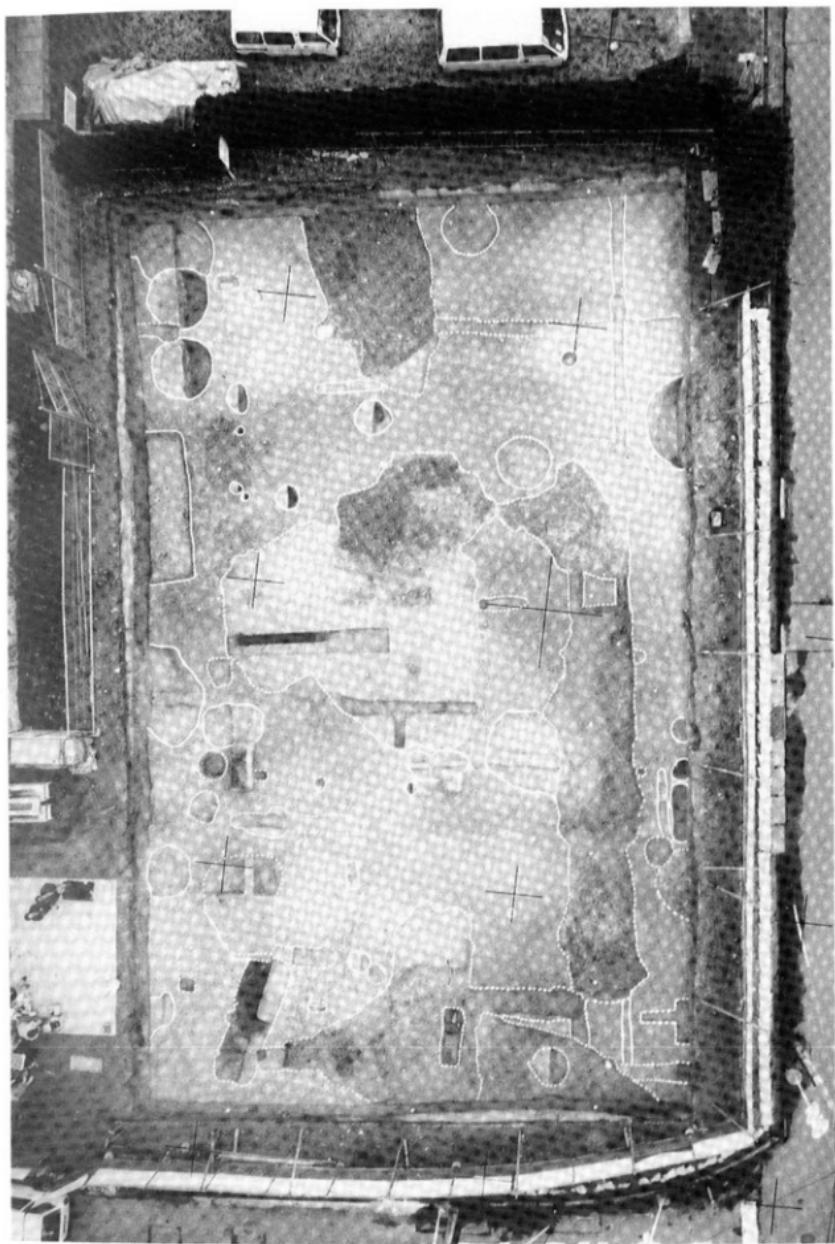


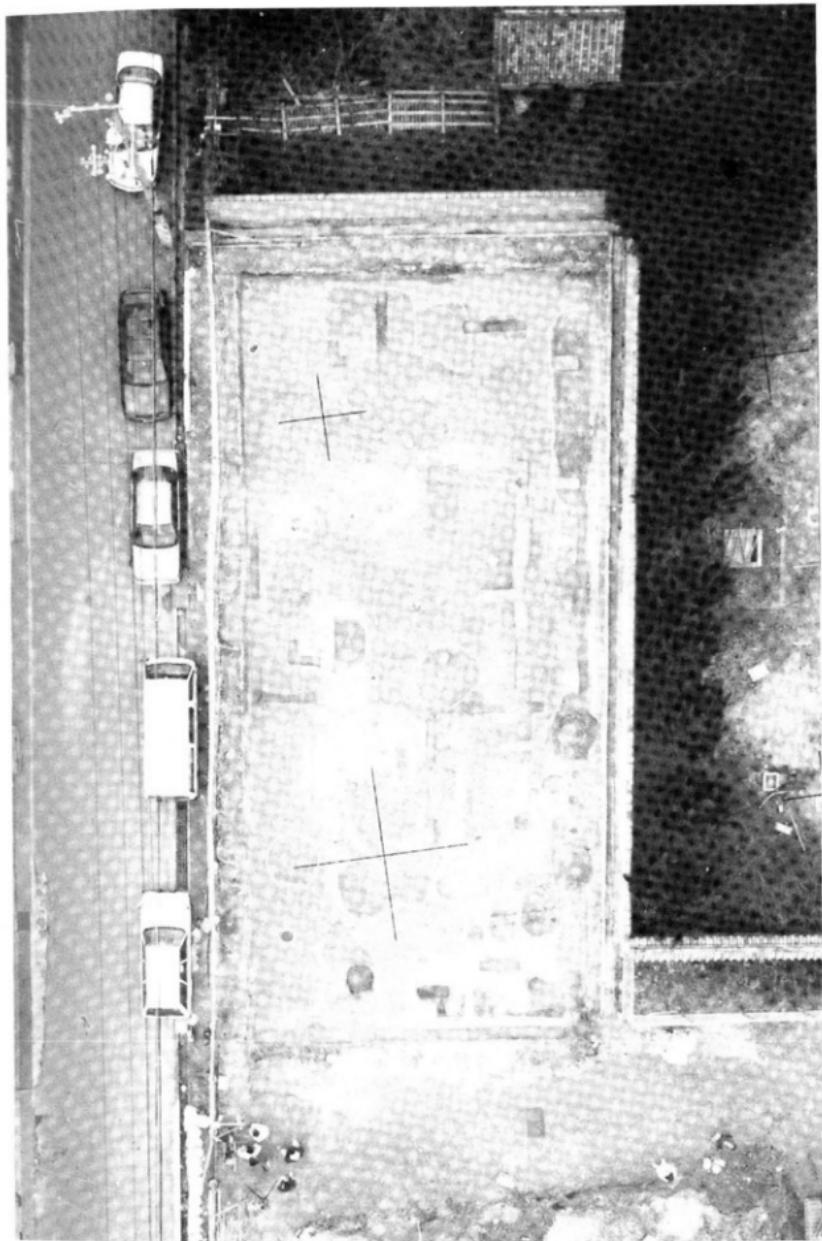
第15図. 中家住宅旧平面図（年代未詳）

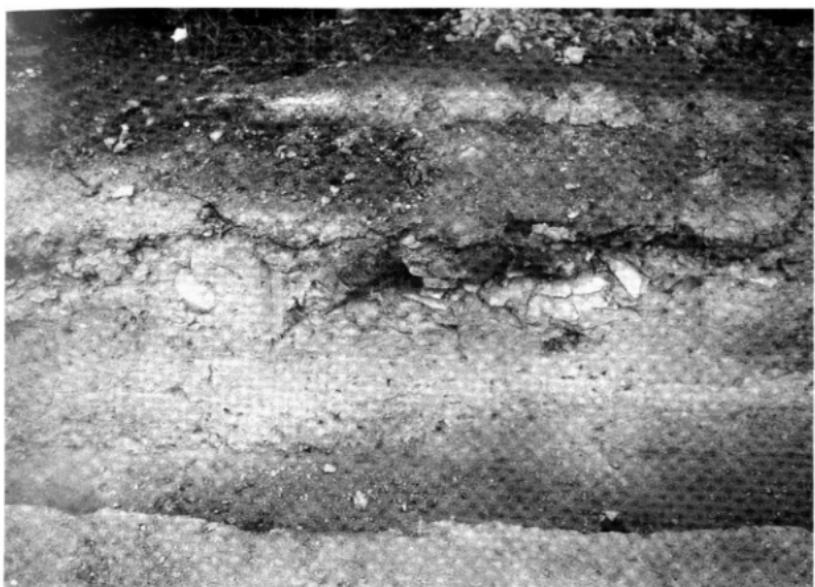
註

- ① 『重要文化財中家住宅修理工事報告書』 重要文化財中家住宅修理委員会 1968. 12
- ② 『熊取町埋蔵文化財報告書第1集』 熊取町教育委員会 1986. 3
- ③ 『熊取町埋蔵文化財報告書第1・2・4・8・9・11・13・15・16・17・19・20・22・23集』 熊取町教育委員会 1986. 3～1995. 3
- ④ 1990年に熊取駅前整備事業として行われた調査であるが未報告。96年度刊行予定。
- ⑤ 『熊取町埋蔵文化財報告書第21集』 熊取町教育委員会 1994. 3
- ⑥ 『大阪府の民家』 大阪府文化財調査報告書 第十編 大阪府教育委員会 1959. 3
- ⑦ 三浦主一「羽柴秀吉の紀州攻撃と大坂」『大阪の歴史』第六号 1982. 3

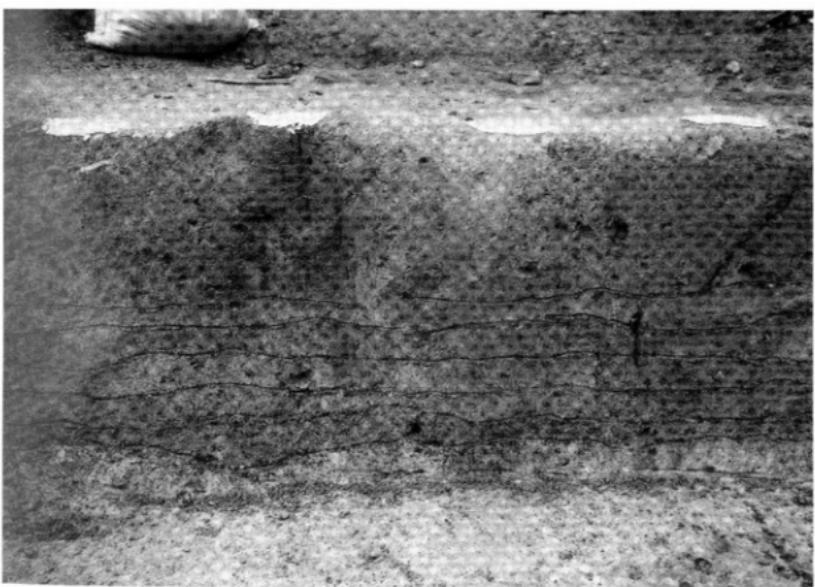
図 版



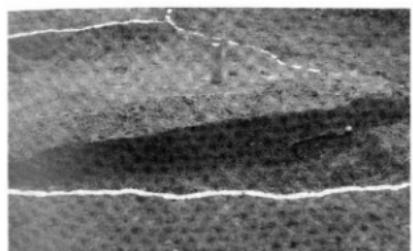




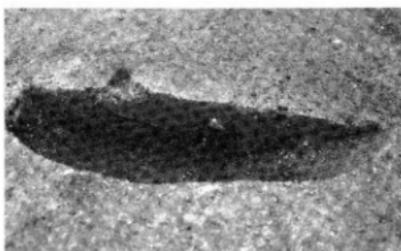
A-1区南壁



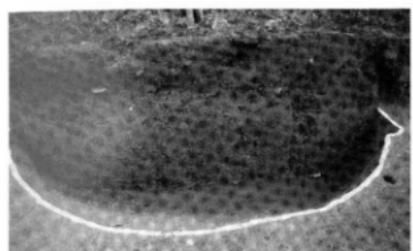
A-2区東壁



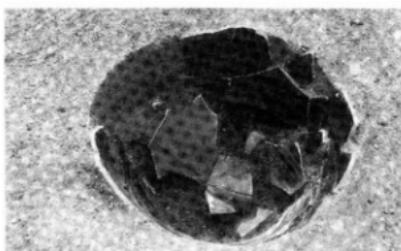
SK 0 5



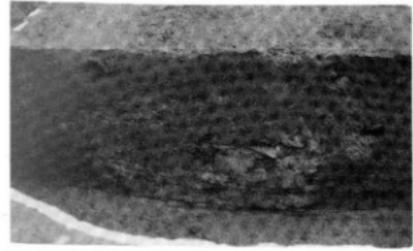
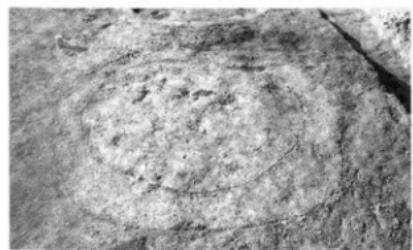
SK 0 7



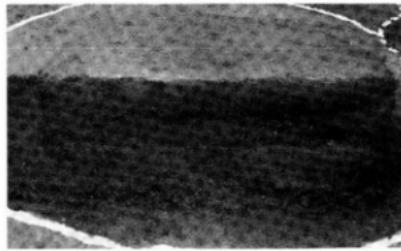
SK 0 8



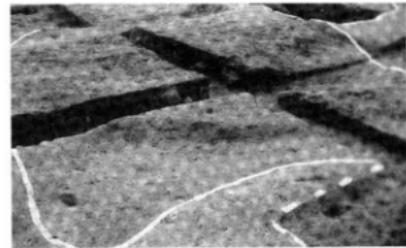
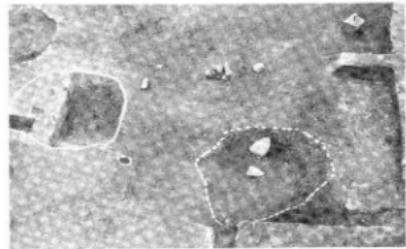
SU 0 1



SK 0 9

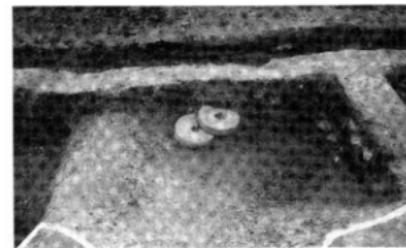
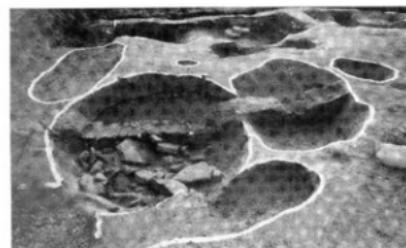


SK 1 0



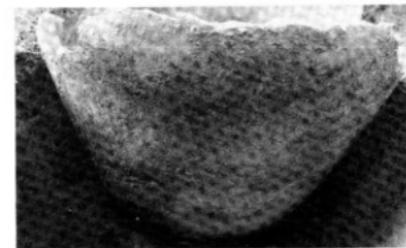
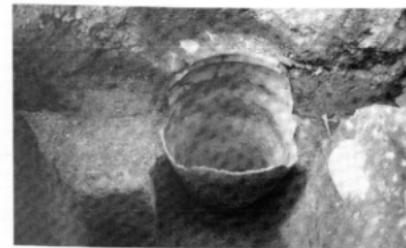
S X 2 1

S X 2 2

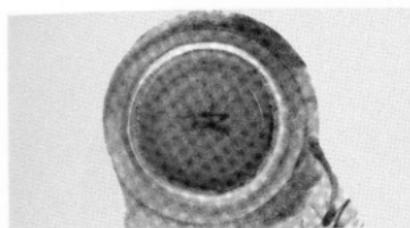
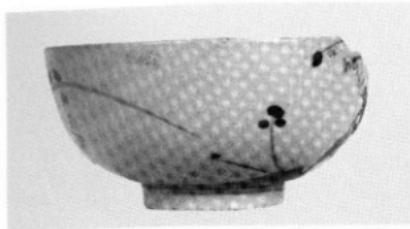


S K 2 2

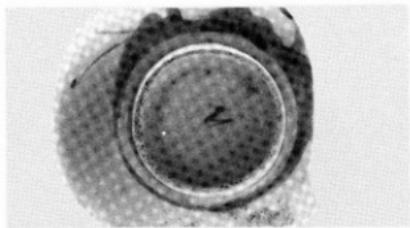
S K 2 7



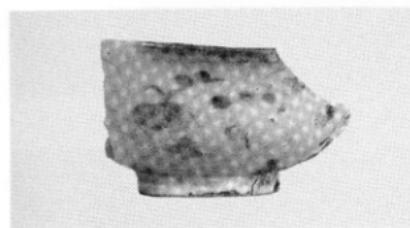
S U 0 2



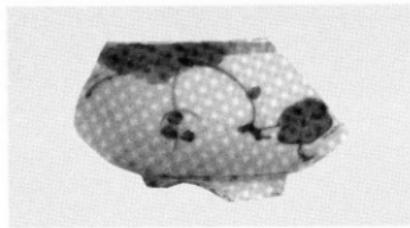
13-1



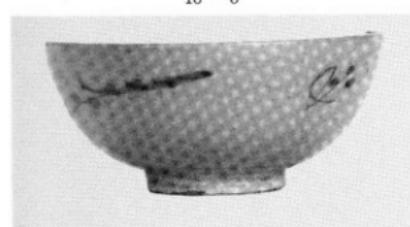
13-2



13-3



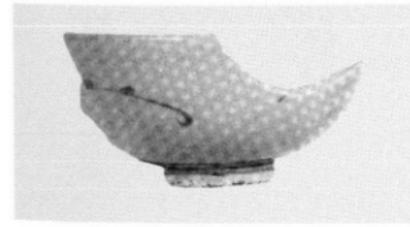
13-4



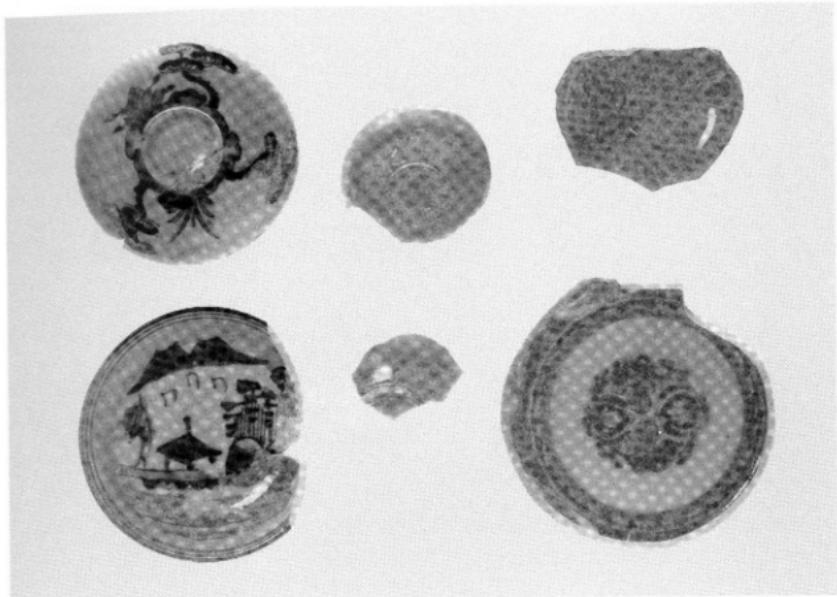
13-5



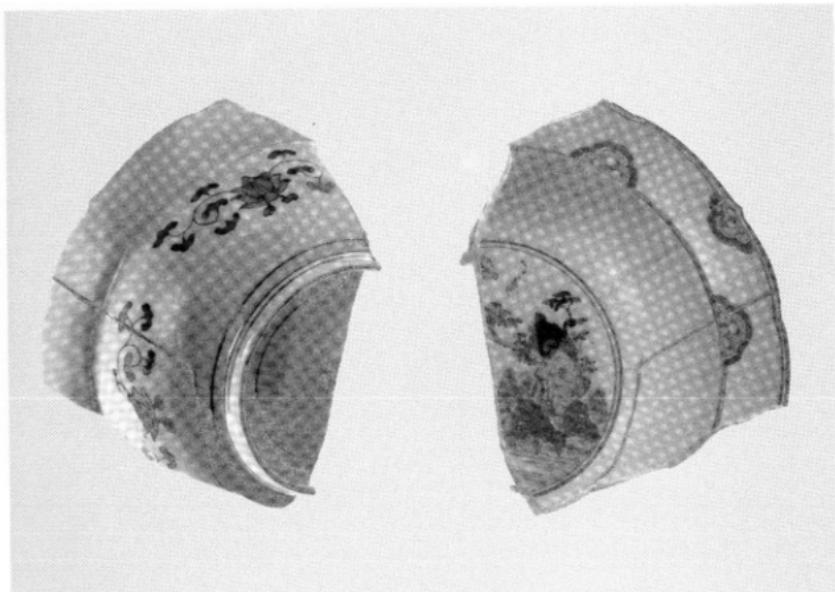
13-6



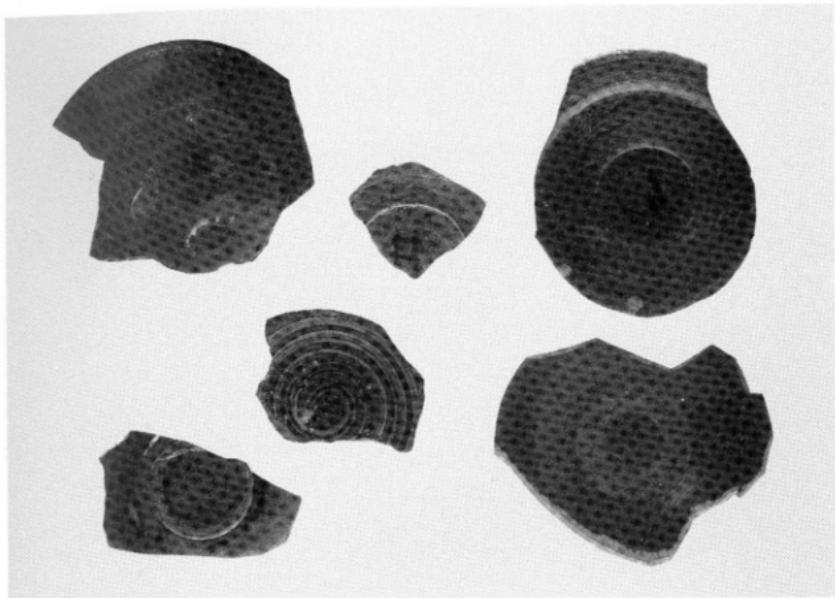
13-7



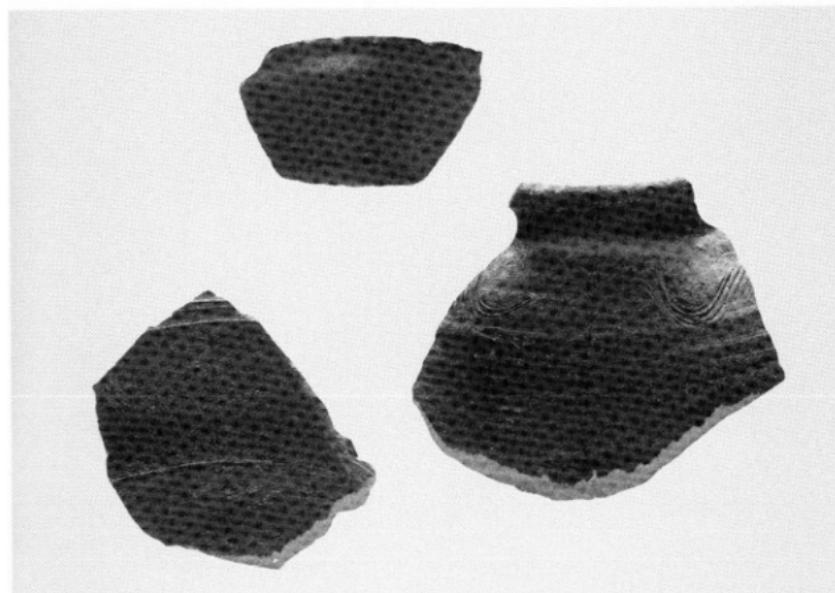
13-8~13



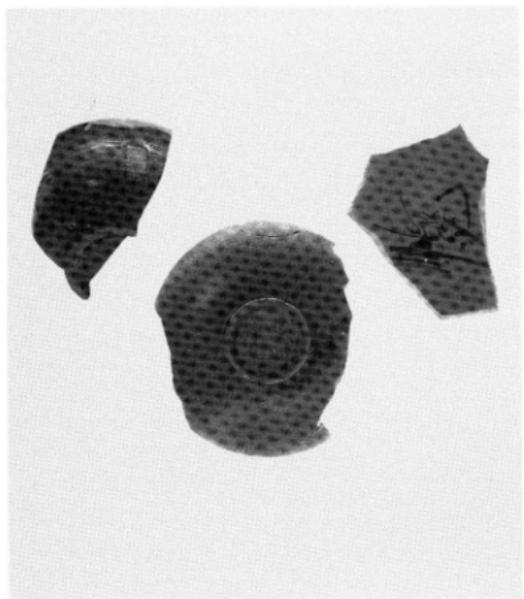
13-14



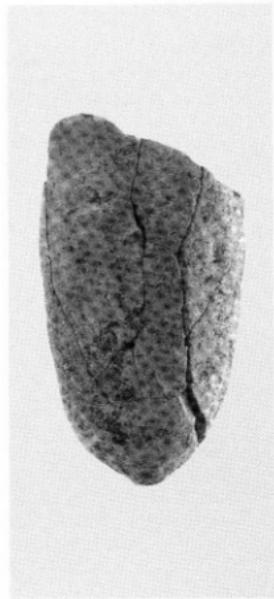
13—15～20



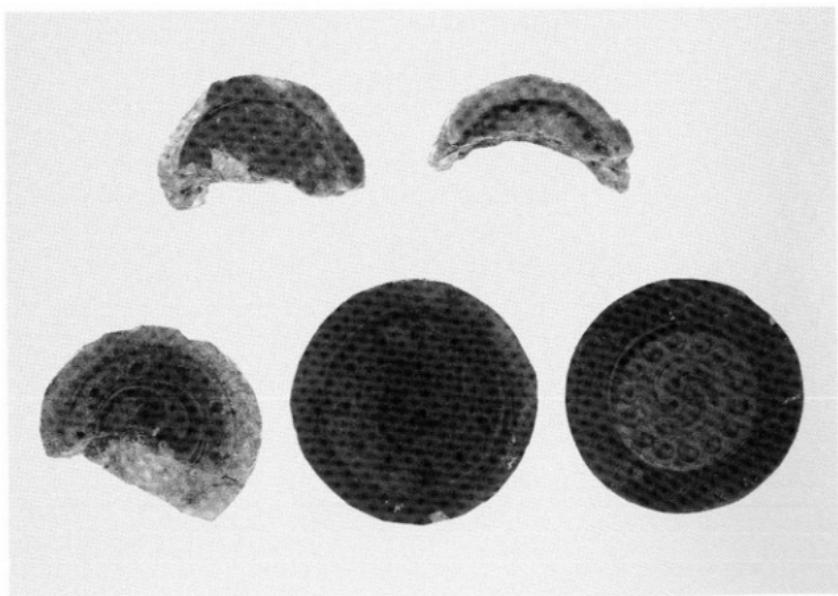
13—21～23



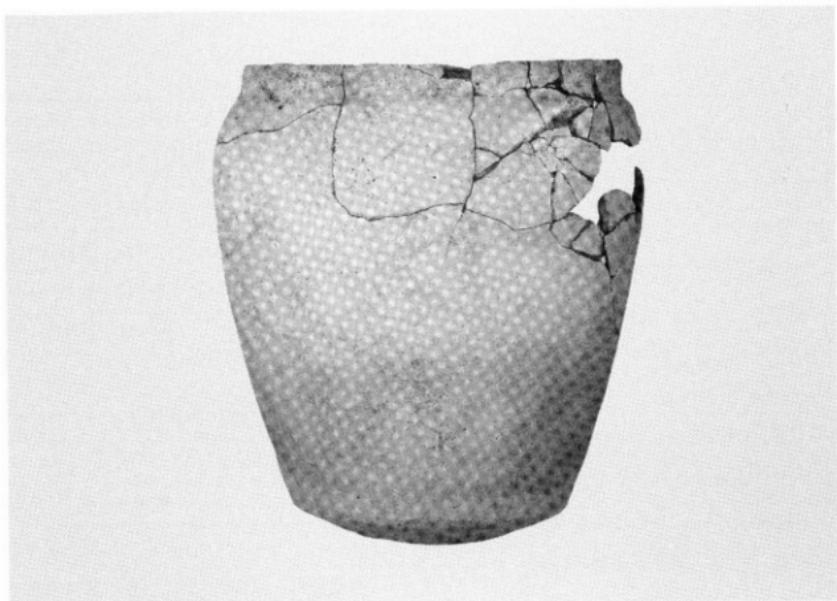
13-24~26



13-27



14-1~5



14-6



14-7

報告書抄録

ふりがな	なかけじゅうたくはっくつちょうさがいよう						
書名	中家住宅発掘調査概要						
副書名	中家住宅94-1区						
巻次	II						
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	永井 仁						
編集機関	熊取町教育委員会						
所在地	〒590-04 大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地 TEL(0724)52-1001						
発行年月日	1996年 3月 29日						

所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北 緯 °' "	東 綏 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかけじゅうたく 中家住宅	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとわらじょうおおあざ 熊取町大字 ごもん 五門26-1 他16筆	27361	2	34° 23' 51"	135° 21' 04"	試掘調査 19940918~ 19940927 本調査 19941108~ 19950116	822	歴史文化施設 整備事業における郷土資料館建設工事及び重要文化財 中家住宅防火施設整備事業における消火設備工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中家住宅	建物跡	江戸時代	埋桶3基 建物跡2基 井戸1基、埋甕2基	須恵器、土師器、瓦器 東播系須恵質土器 壠前壺、唐津・皿 丹波壺、瀬戸美濃碗 肥前系染付碗・皿・鉢 軒丸瓦・軒平瓦	中家住宅建築当時と 同時期に比定される 建物跡と推定される 遺構を2基検出した			

熊取町埋蔵文化財調査報告 第25集
中家住宅発掘調査概要報告書・II
平成8年3月 発行
発行・編集 熊取町教育委員会
貝塚市北町20-18
摂河泉文庫